

医療文化に根差した江戸期インフルエンザパンデミック治療戦略の検証

○島田 佳代子<sup>1</sup>, 高橋 京子<sup>1,2</sup> (<sup>1</sup>阪大院薬, <sup>2</sup>阪大博)

【目的】2009年の新型インフルエンザ世界的流行などをきっかけに、近年、新興・再興感染症対策が一つの重要課題となっている。我々は最新医学の科学的知識を駆使しても、今なお感染症の抗原性の変化の速さや流行の不規則性に翻弄され続けている。そこで、我々は江戸期の漢方医の経験知に着目した。未知の感染症に対する漢方医の対応は、現代においても初期治療の重要な参考となる可能性がある。杏雨書屋の所蔵資料を中心にインフルエンザの治療法について、該当記述を抽出し、理系的解析を試みた。【方法】武田科学振興財団杏雨書屋の所蔵資料の中から、『日本疾病史』（富士川游、1969）などを参考にインフルエンザの流行や治療法についての記述がある文献の選定および解読を行った。それぞれの文献の処方について、その傾向を分析するため、統計解析ソフト Chemish を用いて解析を行った。【結果・考察】文献の通読により、江戸期には、インフルエンザに対して感冒、時疫、天行中風など様々な名称が用いられていたことを確認した。江戸期には大規模な流行が多く発生しているが、それらの発生時期をまとめると、流行の多くは一般的な流行時期である冬以外に発生していることが明らかとなった。そこで、季節による処方の違いに着目し、季節について言及のあった処方についてその構成生薬で主成分分析を行ったところ、冬の流行で用いられる処方とそれ以外の季節に用いられる処方がそれぞれクラスターを形成した。2009年のパンデミックも春から夏にかけて発生しており、冬以外の季節で用いられる処方がパンデミックへの対処において有用である可能性がある。証による治療を行う漢方は未知の病に対する即戦力として期待でき、今後このような古文書解析から現代医療に応用しうる治療法を再発見するためにも、さらなる検討が必要である。